麥畑にはね上るひばりの唄に
風もたのしく舞ひつれる。

夢ははげしい風の歌をたゝずんで聞く。
そだつてくる麥のはかないおどろきを
悲痛な孤獨を片手に抱きよせて。

ほの暗い夢は
ただずんできく。
しだいに

ふしぎな泣き聲の近づくのを——。

3

沼澤の上に月がかかつて、
どんなに氣にかゝる優しさを
私の眸がここに休むか。

荒寥とした
豊艶な月夜は、
大きな梢はそこにある。

うつとりと悲しみをすりつけるために
痲痺する心の重みを懸けるために
梢はある。
銀色の沼の林はある。

やさしい水のかたはらに
玉のやうな花が忍んで咲いて、
死を思ひ出す時迄
その上で
月が光つてゐる。

寝床

(1)

人の力も涙の力もいらない
しなやかな友らのいたはりから逃れたさ
銀色の葦の葉に身をつゝむやうに、
こつそり迎へておくれ、岸よ。

いくつもの光で綴られた
夜の上着は淡水いろに閃き

奇妙な音波と
衣つれと
お互に輕く。

うばらの白い花の上に
それらの律呂が漂ひ動く……
たくさんたくさん顔にあたる
くちぶれの雨よ、發熱する
ねどこ！

水はおりかへし／＼ねどこによせ上る
孤獨の川のライフには
長い重たい疲をのばした丈の睡眠が迫る。
夜におどろく
いくつもの星が
泣き交すすごみ深い眞夜に
私の寝姿があり／＼と星にうつつて。

(2)

私の胸が崩れるやうな抱き方で
顔ぢうが泣いてひかるキッスで

静かな悲しみに永く眠つてゐる、
私の事を思ひゐまつた友達は。

身をせり上る泣聲に
女一人はひたつてゐる。
小岩にむした苔の花にしと〲と
つつまれた女がひとり、岩にねむる。

別な私は氣もとりちらしつゝ
岩の女にすがり乍ら

甘い胸のちひさい影に
からだぢう
……私は泣く。

いばらの唄

岸の微光に
ほのかに風はたゆたいつ。

煙る匂を——
今はしも胸に浴び、
妙なる月しろのかなた
あふれつる女の唄。

夜のをなごはかんばせも
光にぬらされ乍らふりむく。
かよはき息のひゞきさへ
柔かなる肩の光をふりこぼす。

女の夢が白玉のしぶきの中に
なみ〳〵とうねり漂ひ歩く夜半、
岸のいばらはきんの光を近よせつつ
ふるへたる風の下に
よすがら

よすがらにしたひぬ。
光を忘れてのひとりたびに
月許りが、女の眼ばかりが光りて……
更くる
ぼうとしたる岸のそよ風に
撫でらるる裾の喜びをつくして
更くる、更くる。

湖の女

1

空はさり氣なく流れて
そよ〳〵と風が粉のやうにふる。
見る夢はもなかしい
魂は波の上に快よくさらはれて
輕くくはへてねた小指の間から
唇のもれる光は
うつら〳〵と星にさゝやき合へるはなやかさ。

眼の快感の上る命のかげらふは、
すみ渡れる安息を通夜するために夜をこめて——
もろ手をかけた花びらは
ふかい夜のつゆにきらめきつゝ光とさへづる許。

しづくするまではなやかなねむりも
その時私の岩根も形なく埋れぬ。
仲よき花と花とによりて大切に藏はれたれば
きはどく夜は心をさしのばし

月は匂ひたるかんばせに
のぞくかな。

2

空は匂のふんまつにかきくもりて
焔を上げて花らむらがり
花にそそられて花のさく
壯麗な水岸の夜の美觀よ。

身を覆ふ愁の衣を草にひいて
かぎりなく我がかげを止めて嘆く

おぼろなたゞよひをほしいままにする月の下。
首うなだれたひとむらの白百合の
限りなく瞑想し、かりねしてゐる
天蓋にあふれるまですきとうりし夜のわざはひ。

そこにつなぎとめらるる心の亡靈の情ない歎と
さらしはてた身の無念さ。

押付けられすりへらされた生れ乍らの呻吟、

積るすすりなきがかすれて、私の懊惱に。

地心の震動するひと夜……
岸の岩の花ら咲き狂ふ。

紅い花に深く唇を入れたみどりごに向つてさへ
限りない迫るやうなその微笑の愛撫にさへ
言葉が私から死んだかげで綺麗なみどり見よ
私のお禮は涙の外にない。

3

哀愁が舞踏する晩
靜かに月が夜をかきよせて抱く。

葉うらに光は泌みて
地上はしろがね色にひらめくため
ねむりのまぶたはそぞろにふるへて
熱涙が枕にしみ通ふ。

思はふかくおもきくるしみ
床の中にする轉々としたねがへり

こどくのすき通る合唱に
きき入るすべもなく
まつはる夏と眞夜と……

胸をさいて放たれた懊惱の聲
地軌が搖動する
大地に月がさす。

燃えるやうな輝でしげり合つた
森の梢の下へかなしみのおきばへ

涙のちごは行く。
まるみある音樂がその肩からあふれる。
夏の夕から沼に渡した
森の梢の下へ、涙の稚兒は。

雨の唄

雨よ雨よ
もつとおまへの有りたけの力で
もつとまつくらくすさんで了ふ强味を見せておくれ。

いつまでか私があらうとする土の上を
私を野ざらしにしてゆく太陽と土とを目がけて
勢よくたゝきつぶして下さい。

雨の唄

このはげしいふりそゝぎのまん中で
私以外の心がまはだかで狂つて狂つて
彼方で泣き叫ぶとは思ひもよらぬ。

ただ強い凄みで隠したものをあらはすな
一度空に振りかざした聲で
すべてをつゝんで響けよ。

孤獨の愛（畢）

目次

孤獨の愛……（一）
やまうど……（四）
醒めざるものゝ唄……（一四）
病床……（一七）
夜の面ざし……（一九）
岸邊……（二一）
孤獨のいのち……（二三）
不眠の床……（二八）
吾ながら愛する心……（三一）
吾は花の咲きいづる中に……（三三）
淋しき光……（三六）
ひさりみの日……（四一）
のどかなる眺……（四六）
心のやまうど……（四九）

目次

ひろもなほ……（五二）
たゞひとり……（五五）
ひとり身……（五八）
靜かに風の夢みる日……（六〇）
かなしみの日……（六三）
獨唱……（六七）
吾を知らざる悲しさに……（七〇）
夜の唄……（七三）
まひろの水盤……（七六）
夜のことば……（七八）
樹下……（八一）
わが世のさま……（八三）
悲しき愛……（八六）
暗き魂……（八九）
光へ……（九二）

目次

小さいやすみ……（九五）
草刈……（九八）
たとひ難き悲み……（一〇〇）
やすらけきたまひ……（一〇四）
岸のひかり……（一〇七）
小さき笛の音……（一〇九）
夜の光り……（一一三）
憔悴……（一一六）
花の木かげ……（一一八）
沼の歌……（一二〇）
沼の光（その一）……（一二三）
沼の光（その二）……（一二四）
沼の光（その三）……（一二六）
悲哀……（一二八）
初夏……（一三四）

目次

微光……（一三六）
伶人……（一三九）
暮れゆく途……（一四一）
休憩……（一四三）
孤獨……（一四六）
うもれたる悲み……（一四八）
冴えたる晩……（一五二）
たさひ難きかなしみ……（一五四）
心の貧者……（一六三）
初夏さ孤獨……（一六六）
夜ぎり……（一六九）
雪の徑……（一八三）
徑……（一八四）
ひそんだ光り……（一八六）
寢床……（一九一）

いばらの唄……（一九六）
湖の女……（一九九）
雨の唄……（二〇〇）

目次畢

大正十年三月二十日印刷
大正十年四月十五日發行

〔定價壹圓五拾錢〕

著者　澤ゆき子
發行者　川路誠　東京市牛込區白銀町三五
印刷者　佐野次郎　麹町區飯田町五ノ二五
印刷所　精藝出版合資會社　麹町區飯田町五ノ二五

不許複製

發行所　東京市牛込區神樂町一ノ一二　振替口座東京三七七七二　曙光詩社

[illegible]
480

終